

現代美術は難しい——そんな感想を耳にする。普段よく目にする写真や映像は「見ればわかる」が、現代美術の文脈で発表される作品はむしろその逆だ。「見えるが意味がわからない」「ことが少なくない。しかし、「見ればわかる」とは何がわかったことなのか。瞬時にわかるのではなく、わからないことを時間をかけてわかっていくとする。能動的な姿勢へと見る者を変えるのが優れた現代美術作品なのである。

「New Photographic Objects」展は、五組六名の写真と映像を使った作品を展示している。

Nerhol (ネルホル) はアイデアを「練る」、彫刻刀で「彫る」二人のユニット。展示されているのは自身で撮影した動画や、動画サイトから切り出したキャプチャ画像を大量にプリントし、分厚く重ねた上で彫

見ることは考えるきっかけ

刻刀で彫った作品だ。動画の束を彫り進める行為は、時間の壁を破っていくようでもある。考えてみれば、木彫りも年輪に彫刻刀を当てる。あれは時間を遡る行為だったのか。

さらに言えば、この作品は元は動画で、刷り出されたのは写真。彫るプロセスは彫刻で、離れて見ると絵画に見える。複数のメディア、ジャンルをまたいでいる。近づくと彫った痕跡は見えるがイメージが何なのかかわからない。しかし、離れて見るとイメージが浮かび上がる。近寄る、離れるを繰り返すことで、作品の前ですぐす時間が長くなる。



Nerhol 《Portrait of Mr. Yoshida》 2017年、インクジェット・プリント Nerhol Courtesy of YKG / Yutaka Kikutake Gallery

ほかの作品も「わかる」ためには作品の背景を知る必要がある。二百回以上も重ねた映像を3Dで見せる牧野貴。撮影した写真と、未撮影フィルムを沸騰した現像液に入れて得たイメージを重ね合わせる横田大輔。植物の写真を繰り返し複製し、壁面と立方体にコーティングして仮想の庭園をつくる滝沢広。シルクスクリーンとドローイング、写真と動画をリミックスする迫鉄平。

彼らの作品は「見ればわかる」も

のではない。しかし、知識や記憶を総動員し、類似したイメージを見つけて出すことが作品を理解する入り口になる。ネットで検索すれば参考になる情報も得られる。見ることは考えるきっかけなのだ。

せわしない毎日の中で、立ち止まって考えることは難しい。日常から切り離された美術館ならではの展示だと言えるだろう。

(タカザワケンジ // 写真評論家)

*さいたま市浦和区常盤9の30の1、埼玉県立近代美術館=電048・824・0111=で。9月6日まで。月曜休館(8月10日は開館)。